

学生によるデモンストレーションの評価と学習状況の検討

高橋方子¹⁾、竹本由香里¹⁾、三國和美¹⁾、阿部智美¹⁾、土屋香代子¹⁾

キーワード：デモンストレーション、評価、看護技術、学習状況

要 旨

看護技術演習で学生自身がデモンストレーションを実施することの評価と学習状況を明らかにすることを目的に本研究を行った。演習に参加した学生に質問紙による調査を行い、55名のデータを分析した。デモンストレーションを実施した群と実施していない群の2群に分けて比較した。その結果以下のことが明らかになった。「グリセリン浣腸」と「一時的導尿」ではデモを実施した学生のほうが、形態機能学の復習をしているものが多く、また練習回数も多かった。学生がデモンストレーションを実施することについて、デモンストレーションを経験した群は92%、経験しなかった群は77%が、「良かった」と評価していた。経験した群は、良かった点として「技術の習得」「学習意欲の向上」など4項目、良くなかった点として「時間に対する負担」「学習内容の差」等3項目を挙げていた。また実施しなかった群は、良かった点として「学習意欲の向上」「同じ視点」など5項目、良くなかった点として「デモの担当による負担感」「学習内容の差」など3項目を挙げていた。

Nursing Students' Evaluation of Practice Demonstrations: Its Implications

Masako Takahashi¹⁾, Yukari Takemoto¹⁾, Kazumi Mikuni¹⁾, Tomomi Abe¹⁾, Kayoko Tsuchiya¹⁾

Key words : demonstration, evaluation, nursing skill, implication

Abstract :

The purpose of this study was to determine the implications of nursing students' evaluation of practice demonstrations in the course "Nursing Skills Practice." We administered a questionnaire to students enrolled in the course and received valid data from 55 students. The respondents were divided into two groups: students who demonstrated their practice of certain skills and those who did not. Some of our findings are as follows.

In the demonstrated practice of glycerin enema and temporal urethral catheterization, students in the demo group spent more time on reviewing anatomy and physiology and practiced their skills more than those in the non-demo group.

The student practice demonstrations were viewed favorably by 92% of the demo group and 77% of the non-demo group. Students in the demo group thought the demonstrations helped them in four categories, including 'mastery of skills' and 'enhancement of motivation to learn', while they pointed out as the liabilities of the demo practice four items including 'difficulty in adjusting the schedule' and 'different levels of learning'. Respondents in the non-demo group, on the other hand, liked the demonstrations in five categories including 'enhancement of motivation to learn' and 'development of empathy', but they viewed the practice negatively in terms of three items such as 'burden of conducting demonstrations' and 'different levels of learning'.

1) 宮城大学看護学部

Miyagi University School of Nursing

I. はじめに

看護技術は専門的知識に基づいて対象の安全、安楽、自立を目指した目的意識的な直接行為であり、実施者の看護観と技術の習得レベルを反映するものである¹⁾。看護技術はそれを構成する要素とともに「看護職として必要な基本姿勢と態度」や「管理的な能力」とが統合され対象者に提供されるものであり、看護実践の重要な要素である²⁾。

これまでの看護技術の習得は臨地での経験によるところが大きかった。しかし、実習時間の減少や患者の権利の明確化などにより、学生が経験を積み看護技術を習得することが困難な状況となり、学内での看護技術教育のあり方が問われるようになった。医学中央雑誌で「看護技術」「教育方法」をキーワードに1983年から2005年にかけて検索を行ったところ、194件を抽出したが、そのうち156件は2002年からのものであり、技術教育の関心の高さが伺える。

2001年の看護学教育ワークショップの報告では、看護基礎教育課程において、基礎的な知識、基本的な共通の手技と共通の生体反応については、学内の講義、学生同士の役割モデル等によって演習や高機能の教材を用いることによって可能であるとしている³⁾。これまでの学内での看護技術の教育方法として、教員によるデモンストレーションを学生が模倣するという実演法が一般的であった。この方法は具体的に行為を見せることができ、理論と実践とを相関させ学生に興味を持たせることができるとされている⁴⁾。しかし、この方法は学生が受身になり、手順を覚えるレベルにとどまりがちになると考えられる。ワークショップで示された内容を学内の教育で身に付けさせるためには、学生が主体的に看護技術の学習に取り組む、自分で考えながら学習するような教育方法の確立が望まれる。

学生が主体的に看護技術の習得に取り組むために、学生同士で技術を教えあう、あるいはグループ学習を取り入れる方法⁵⁾⁻⁸⁾、実験など検証法を用いるもの⁹⁾⁻¹¹⁾、チェックリストを活用する¹²⁾¹³⁾など各教育機関で様々な工夫がなされ報告されている。本大学では学生のモチベーションを高め、手順や物品にとどまらず、知識の裏づけや目的意識、

対象に対する配慮など含めた看護技術を習得させることが重要だと考え、学生自身がデモンストレーション（以下デモ）を行うことを看護技術演習に取り入れた。授業評価では「デモを実施できてよかった」等の記述が見られるものの、学生がデモを実施することの効果や学生自身の評価をこれまで明確にしておらず、今後看護技術の教育方法を検討するにあたりこれらを明らかにする必要があると考えた。本研究では学生によるデモの評価と、デモを実施した学生と実施していない学生の学習状況を検討することを目的に行った。

II. 研究方法

1. 研究方法

A大学2年生94人を対象に、看護援助技術論Ⅱ・Ⅲの講義最終日（2005年7月）に、学生がデモを行った演習（グリセリン浣腸、一時的導尿、筋肉内注射）について、自記式質問紙調査を行った。質問紙は講義終了後から2週間、回収ボックスを設置し回収した。質問紙は研究者2名で授業の学習目標を基に、独自に作成した。

質問紙の内容は、各技術の習得度に対する自己評価、事前学習内容、練習回数、学生によるデモを授業に取り入れることの評価と「デモの良かった点、良くなかった点」についてだった。回答方法は、自己評価は「できない」から「できる」の5段階で回答してもらい、事前学習は「何もなかった」「要項を読んだ」「テキストを読んだ」「ビデオを見た」「形態機能学の復習をした」「インターネットで調べた」の6項目から当てはまるものについて複数回答をしてもらった。また練習回数は「演習の時だけ」「演習時以外に1回、2回、3回以上」の4段階から選択してもらった。デモの評価は「よくなかった」から「非常に良かった」までの5段階で選択してもらい「デモの良かった点、良くなかった点」については自由記述で回答してもらった。

倫理的配慮として、質問紙は無記名で、得られたデータは統計的に処理し匿名性を確保した。調査に参加しないことで不利益のないことを質問紙配布時に口頭と紙面で説明を行った。参加への同意は質問紙の回収により得ることとした。

2. 分析方法

各技術の習得度、事前学習内容、技術の練習回数はその技術の「デモを実施した群」と「実施していない群」の2群に分けて比較した。各技術の習得度及び技術の練習回数についてはMann-WhitneyのU検定を、事前学習についてはFisherの直接検定を行った。また学生によるデモの実施についての評価は「デモを経験した群」と「経験しなかった群」とに分け、Mann-WhitneyのU検定により比較検討を行った。これらの分析に関してはSPSS (Ver. 13) を使用した。自由記述はひとつの意味内容を1データとし、類似するものをカテゴリー化した。2名の研究者がおのおの分類し、異なるものについて再検討し信頼性の確保に努めた。

Ⅲ. 学生が実施するデモンストレーションについて

1. 看護技術に関する学習の流れ

学生は1年次後期に看護技術論及び看護援助技術論を履修する。看護技術論では、すべての看護場面に共通する技術(安全、コミュニケーション、健康の評価技術など)について学び、看護援助技術論Ⅰでは清潔や活動などの基本的なニーズを充たすための援助技術を学ぶ。2年次前期には、看護援助技術論Ⅱ(栄養や排泄などの生理的なニーズを充たす援助技術)、看護援助技術論Ⅲ(無菌操作、与薬・検査時などの治療関連技術)を履修する。

演習は学生全体をA・Bの2グループに分け、その中で1グループ3人の小グループを構成し、看護者役・患者役を交代して技術の学習を行う。グループ構成は学年ごとに変更になる。

2. デモンストレーションの方法について

1年次の演習では、すべての技術において教員がデモを行い、その後グループごとにデモと同じ内容を学生自身が練習する。2年次前期には、「食事介助」「無菌操作」「グリセリン浣腸」「一時的導尿」「筋肉内注射」「静脈内注射」「採血」「吸引」の演習が組まれている。学生がデモを実施するには、グループ内の関係性がある程度できていることが必要なため、前期の中間に配置されている「グ

リセリン浣腸」「一時的導尿」「筋肉内注射」のデモを実施するようにしている。

3. 学生がデモンストレーションを実施するまでの手続き(流れ)

「排泄」及び「与薬」の講義時に学生が行うデモについて説明を行い、デモ実施の希望グループを募る。学生からの申し出がない場合は、学生の同意を得て教員がデモを実施するグループを指定する。教員が指定する場合は、グループダイナミクスが比較的安定しているグループを選び、グループ内の一部の学生にだけ負担がかからないように配慮している。学生は使用物品の説明を受けた後、自己学習を行い、デモを実施できるレベルまで教員の指導を受けながら自己学習を繰り返し、演習(デモ)に臨む。

「グリセリン浣腸」「一時的導尿」は技術のすべてについてデモを実施するが、「筋肉内注射」は細かい操作が多いため、手技を含まず、注射部位の取り方のデモを行う。

Ⅳ. 結果

94人のうち57人(60.6%)から回収し、デモの実施の有無について回答が不十分だった2人を除く55人(58.5%)のデータを分析した。対象の内訳は女性51人(92.7%)、男性4人(7.3%)だった。

デモの実施状況はグリセリン浣腸8人(14.5%)、一時的導尿9人(16.4%)、筋肉内注射7人(12.7%)、実施していない学生は31人(56.4%)だった(図1)。

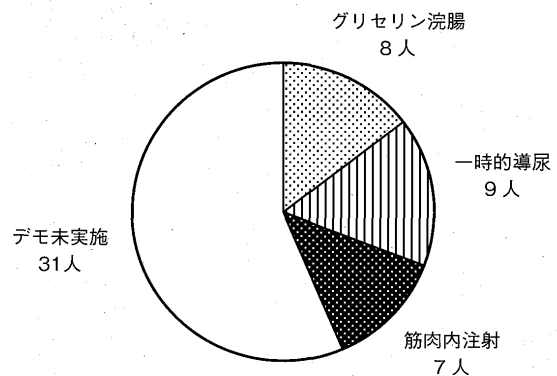


図1 デモンストレーションの実施状況

1. 各技術実施の自己評価

(1) グリセリン浣腸

グリセリン浣腸のデモを実施した学生 8 人のうち 4 人 (50.0%) が「一人でできる」残りの 4 人 (50.0%) が「助言があればできる」と回答した。またデモを実施していない群では、31 人 (68.9%) の学生が「助言があればできる」と回答し、14 人 (26.4%) の学生が「どちらとも言えない」「ほとんどできない」と回答していた(図 2)。2 群間には有意な差が見られた ($p < 0.05$)。

(2) 一時的導尿

一時的導尿のデモを実施した学生 9 人のうち 3 人 (33.3%) が「一人でできる」、残りの

6 人は「助言があればできる」と回答した。デモを実施しなかった群では、「一人でできる」と回答したものはおらず、27 人 (60.0%) が「助言があればできる」と回答した(図 3)。2 群間には有意な差が見られた ($p < 0.01$)。

(3) 筋肉内注射

筋肉内注射ではデモを実施した 7 人は、「一人でできる」1 人 (14.3%)、「助言があればできる」4 人 (57.1%)、「どちらとも言えない」2 人 (28.6%) と回答にばらつきがあった。またデモを実施していない群は「助言があればできる」が最も多く 28 人 (59.6%) だった(図 4)。実施した群と実施しなかった群で差は見られなかった。

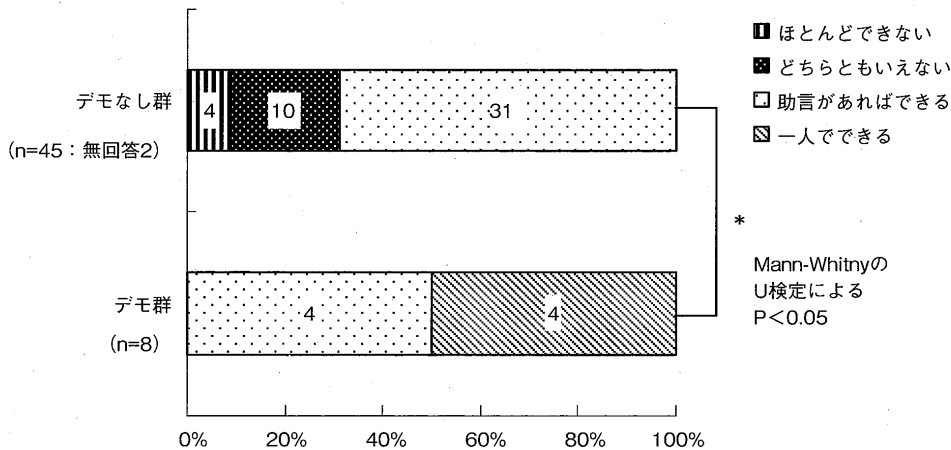


図 2 グリセリン浣腸の自己評価

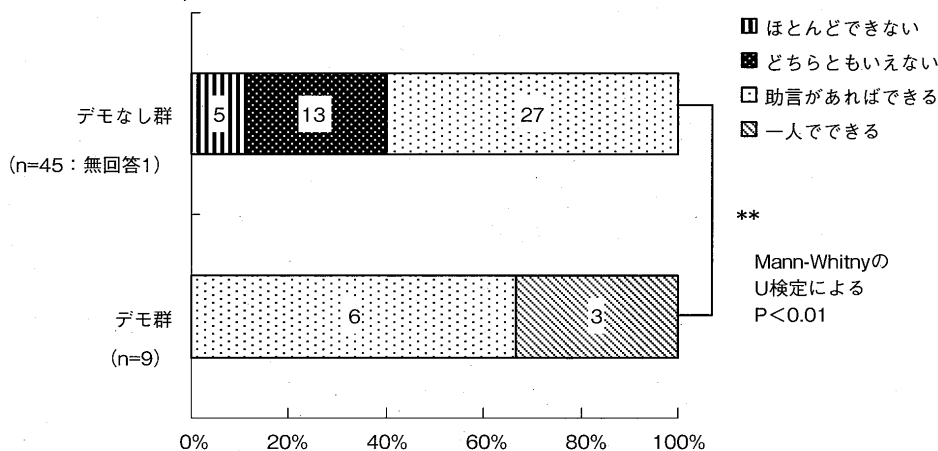


図 3 一時的導尿の自己評価

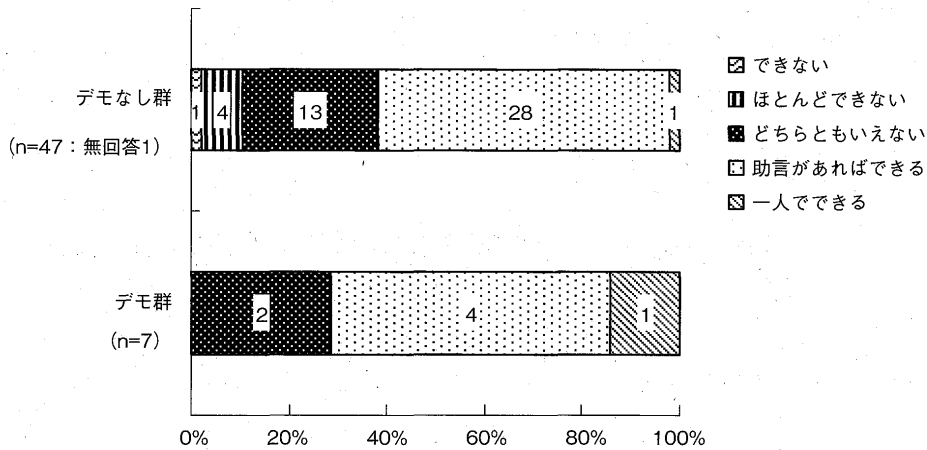


図4 筋肉内注射の自己評価

2. 事前学習について

(1) グリセリン浣腸

グリセリン浣腸のデモを実施した群は、無回答の1人を除き7人全員が演習要項とテキスト読み、ビデオを見ていた。また5人(71.4%)が形態機能学の復習し、6人(85.7%)がインターネットで調べていた。

デモを実施していない群では、形態機能学の復習をしていたものは4人(8.9%)、インターネットを調べたものは2人(4.4%)だった(図5)。デモを実施した群と実施しなかった群で、「形態機能学の復習をした」「インター

ネットで調べた」において有意な差が見られた($p < 0.05$, $p < 0.01$)。

(2) 一時的導尿

一時的導尿のデモを実施した群は8人(88.9%)がテキスト、ビデオを使って学習し、形態機能学の復習を行っていた。デモを実施していない群では41人(93.2%)がビデオを見ており、また40人(90.9%)が演習要項を読んでいた。しかし形態機能学の復習をしたものは3人(6.8%)だった(図6)。デモを実施した群と実施しなかった群では形態機能学の復習において有意な差が見られた($p < 0.01$)。

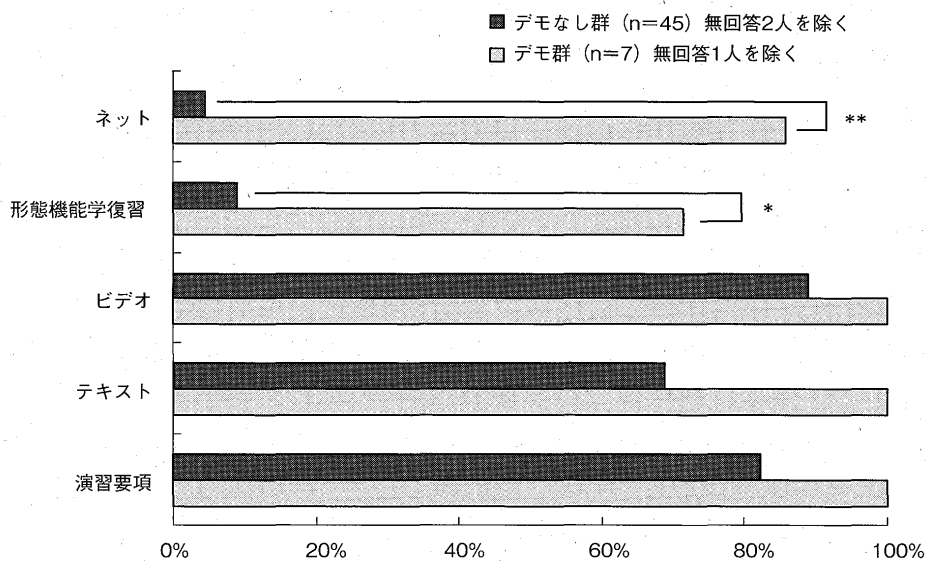


図5 グリセリン浣腸の事前学習

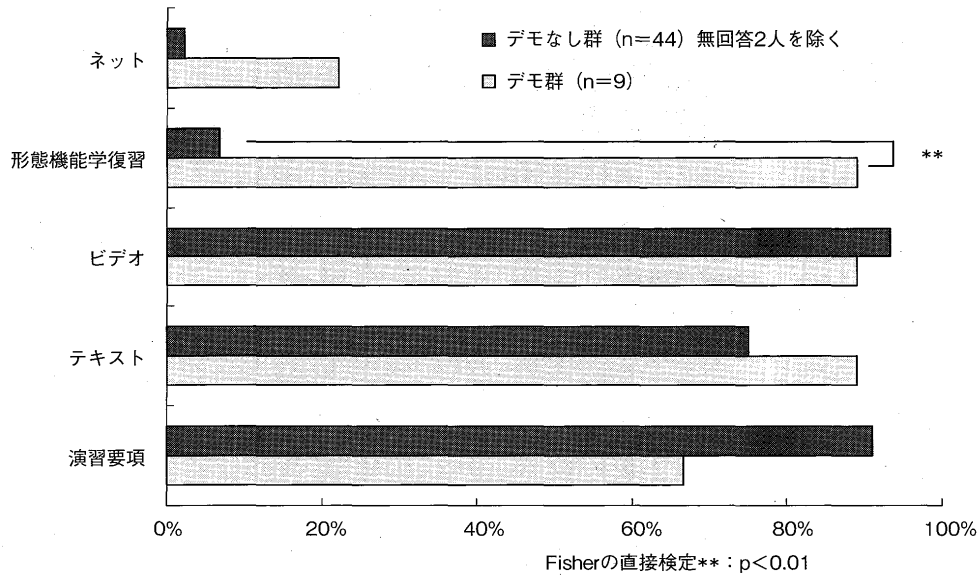


図6 一時的導尿の事前学習

(3) 筋肉内注射について

デモを実施した学生の群では回答した7人(100%)が、実習要項、テキストを読み、またビデオを見ていた。形態機能学の復習をした人は6人(85.7%)、インターネットで調べたで学生は3人(42.9%)だった。デモを実施していない学生の群でも40人(87.0%)が演習要項を読み、39人(84.8%)がビデオを見ていた。また形態機能学の学習も31人(67.7%)インターネットで調べた人も15人(32.3%)いた(図7)。

デモを実施した群と実施しなかった群とでは各学習手段に有意な差はなかった。

3. 技術の練習回数について

(1) グリセリン浣腸

デモを実施した学生は7人(100%)が演習時以外に3回以上練習を行っていた。デモを実施していない学生のうち44人(97.8%)が「演習時のみ又は演習時以外に1回」と回答していた(図8)。デモを実施した群と実施していない群では有意な差があった(p<

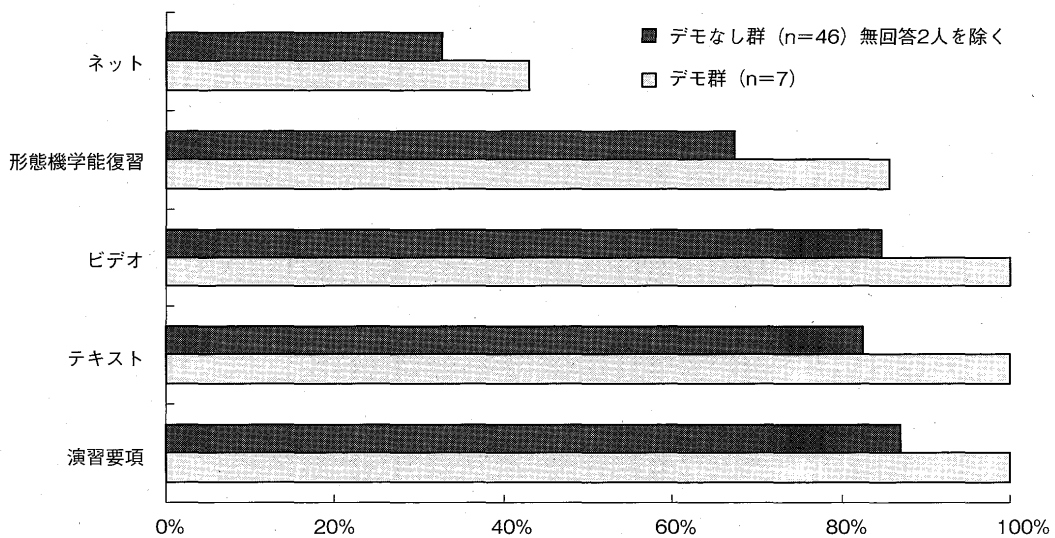


図7 筋肉内注射の事前学習

0.01)。

(2) 一時的導尿について

デモを実施した学生は8人(100%)が演習時以外に3回以上練習を行ったと回答していた。デモを実施していない学生は35人(79.6%)が「演習時のみ又は演習以外に1回」と回答していた(図9)。デモを実施した群と実施していない群では有意な差があった($p < 0.01$)。

(3) 筋肉内注射について

デモを実施した7人のうち3人(42.9%)は演習時以外に1回、1人(14.3%)は演習時以外に2回、3人(42.9%)は3回以上と回答していた。

デモを行っていない学生は演習時または演習時以外に1回と答えた学生は39人(88.6%)だった(図10)。2群間で差は見られなかった。

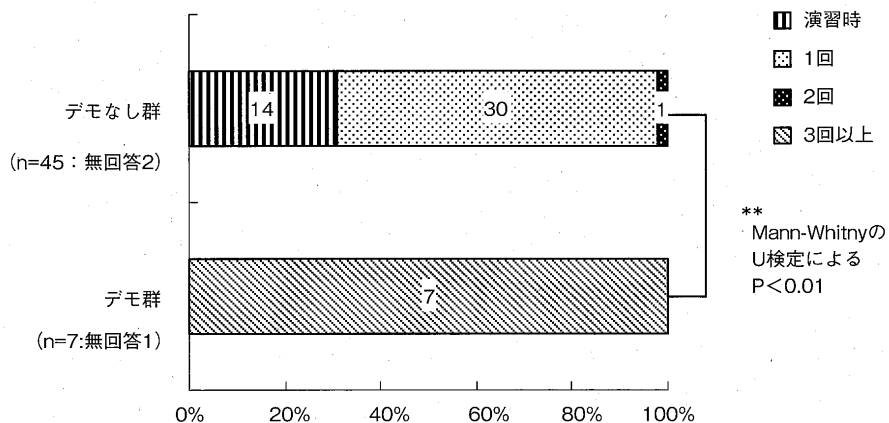


図8 グリセリン浣腸の練習回数

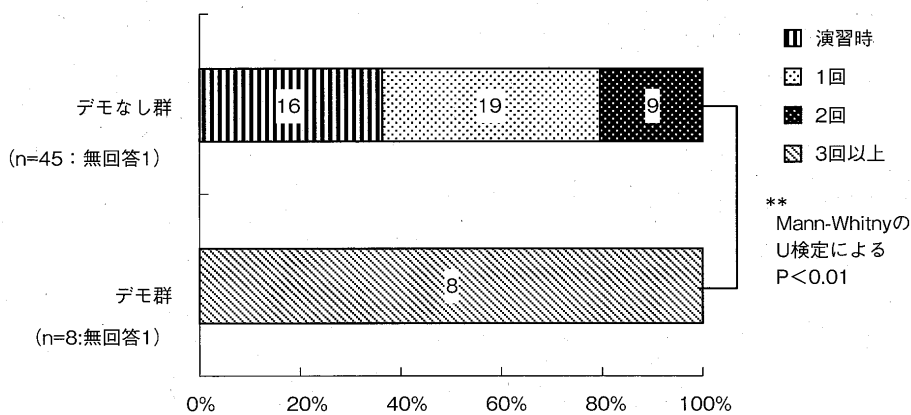


図9 一時的導尿の練習回数

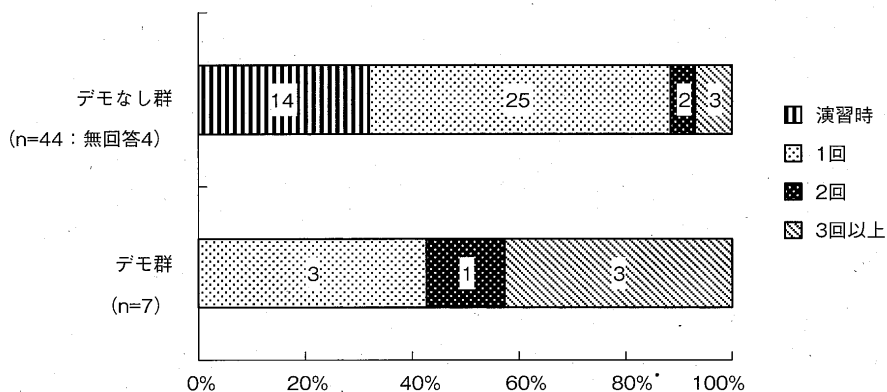


図10 筋肉内注射の練習回数

4. 学生によるデモンストレーションの評価

(1) 評価について

いずれかの看護技術のデモの実施を経験した学生と経験していない学生の2群に分けて検討をした。経験した学生は24人、経験のない学生は31人だった。デモを経験した群で「(非常に・まあまあ)よかった」と答えた学生は22人(91.7%)、経験のない群は24人(77.4%)だった(図11)。

(2) デモの実施で良かった点

デモを経験した群は「技術の習得」「学習意欲の向上」「同じ視点」「学生デモの推奨」の4つのカテゴリーに分類された(表1)。またデモを経験しなかった群では「学習意欲の向上」「同じ視点」「わかりやすさ」「関心をもてる」「動機付け」「デモグループへの称賛」の

5カテゴリーに分類された(表2)。

(3) デモの実施で良くなかった点

デモを経験した群は「時間に対する負担」「学習内容の差」「デモのわかりにくさ」の3カテゴリーに分類された(表3)。「時間に対する負担」では練習に時間がかかることや教員との打ち合わせの時間を作ることについての負担が述べられていた。

デモを経験しなかった群では「デモの担当による負担感」「デモのわかりにくさ」「学習内容の差」の3カテゴリーに分類された(表4)。「デモの担当による負担感」では自分が担当したときの事を考えて「いやだ」「大変そう」などの感想が含まれていた。

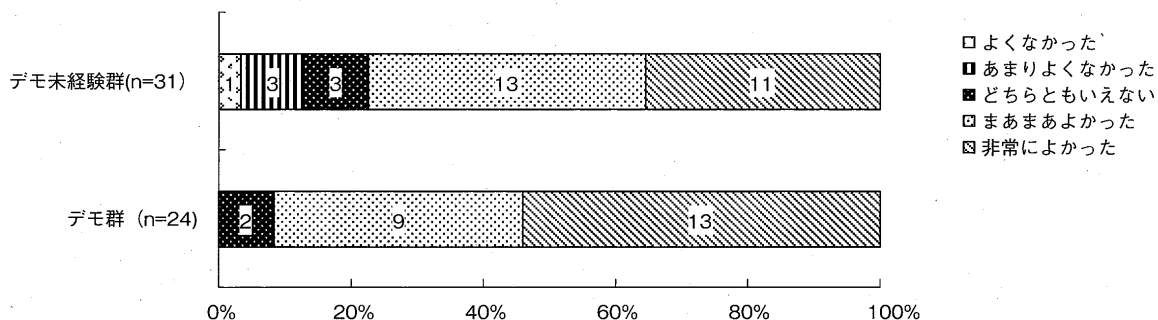


図11 デモンストレーションの評価

表1 良かった点 (デモ経験群)

*デモ経験群 24 人のうち 20 人 (83%) が回答

カテゴリー (データ数)	内容例
技術の習得 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・デモを担当することによって、事前学習を十分に行ったのでより知識・技術を得ることができた。 ・デモを任されることによって、積極的に練習も行いよく調べたりする分、ずっとやったことが頭に残る。わかってもらえるように心がけたり、人に説明することで再度確認できる。 ・実際、デモの担当をしてみて学びを深める事ができたから。
学習意欲の向上 (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に講義の準備にとりくめた。 ・やらなくてはいけないという責任から自主的に行うことができたのでよかった。 ・学生がデモを行うことで、自分も頑張ろう! という気持ちになる。
同じ視点 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の目線から疑問が解決できるため。 ・学生同士のレベルのギャップは、学生と教員のレベルのギャップよりも小さいので、デモの内容が、学生にとっていいレベルになっている。
学生デモの推奨 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・もっといろんな項目でデモを行ってほしいと思う。普段の演習を適当にしているわけではないけど、もっとみんなにそのような気持ちでやってもらいたいと思った。

表2 良かった点 (デモ未経験群)

*デモ未経験群 31人中22人(71%)が回答

カテゴリー (データ数)	内容例
学習意欲の向上 (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と同じ「学生」がデモストを行うということで自分自身も事前学習により力を入れることができた。また、デモストを行う学生が事前学習を行っているのを見て、自分の事前学習への刺激となるので。 ・自分のグループが担当じゃなくとも、その担当になった友達の勉強する姿を見て「自分もやらなきゃ」という気になれた。 ・デモを行うグループはとても勉強していて、自分もしないといけないと思わされた。
同じ視点 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生自身がやっているため、わからない点と同じなのでわかりやすかった。 ・同じ視点での技術に関する考え方をみることができる。 ・説明するポイントも学生の視点にあったところを重点に説明してくれたので、とてもわかりやすかったと思います。
わかりやすさ (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすかった。 ・事前に良く調べてあって、分かりやすかった。
関心もてる (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもとは違った感じで見れて良かった。 ・自分が行っているつもりで見ることができた。わからない点が質問しやすかった。
デモグループへの称賛 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・デモ担当の学生は頑張っていた。 ・しっかり調べていて、すごいと思った

表3 良くなかった点 (デモ経験群)

*デモ経験群 24人のうち11人(46%)が回答

カテゴリー (データ数)	内容例
時間に対する負担 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・デモを担当すると授業の合間に準備したりでとても忙しかった ・事前に先生にデモの様子を見せに行かなければならないが、その時間を上手くとれなくて大変だった。空き時間があまりなくて忙しかった。
学習内容の差 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・行わなかった人との学習の差が出る。 ・デモの人以外は予習が少ない。
デモのわかりにくさ (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・デモの順序立てが、教員よりもやはり徹底されていない ・説明をズラズラッと読まれる部分は聞きとれず、ためにならなかった。

表4 良くなかった点 (デモ未経験群)

*デモ未経験群 31人中18人(58%)が回答

カテゴリー (データ数)	内容例
デモの担当による負担感 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習が大変そう。 ・デモに当たったらいやだ。 ・デモンストレーションをする学生の時間がとられる。
デモのわかりにくさ (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・声が小さい。 ・説明の部分が早すぎて分からないところがあった。大事なポイントも分からなかった。 ・聞こえづらかった。
学習内容の差 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・デモンストレーションをした人との学生で技術の差が生じる。 ・選ばれたグループの人だけが、うまくなる傾向があり、偏りが出そうだと感じた。 ・デモをやった者とやらなかった者との差が開きすぎるのではないだろうか。デモの詳しい資料や、話の内容が明記されていないためにメモをとるのが精一杯であり、デモ自体をよく見るができなかった。

VI. 考 察

1. 技術の自己評価について

グリセリン浣腸、一時的導尿では、デモを実施した学生は「一人でできる」又は「助言があればできる」と回答し、デモを実施していない群より、評価が高かった。しかし、デモを実施していない群でも60%以上の学生が「助言があればできる」と回答した。デモを実施していない学生の群は実施した群と比較して、形態機能学の復習をしたものは少なく、また練習回数も少ないことから、技術の習得度は低いと考えられる。「助言」の捉え方は学生によって異なり、「助言があればできる」の評価の基準は非常に幅があると推測された。評価が曖昧な場合は自己の課題を明確にすることは難しい。学生が到達すべきレベルを明確に示すことが今後必要だと考えられた。

2. 事前学習について

事前学習として、デモを実施した群も実施しなかった群も、「ビデオを見る」「演習要項を読む」「テキストを読む」について事前学習をしている学生は多かった。しかし、グリセリン浣腸、一時的導尿では「形態機能学」の復習に関して2群間で差があり、デモを実施した学生群のほうが形態機能学の復習をしている割合が高かった。グリセリン浣腸、一時的導尿、筋肉内注射ともに身体侵襲を伴う技術であり、形態機能学の知識が欠かせない。しかし知識の部分は具体的な行動には現れないため、学習がおろそかになりがちである。デモを担当した学生は、ひとつひとつの行為の理由を他の学生に説明しなければならぬため、形態機能学の学習をし、またその結果、手技だけでなく知識にもとづいた看護技術を実感し、技術を習得できたという評価につながったと考えられた。

筋肉内注射はデモを実施した群も実施しなかった群も形態機能学の復習を行っている学生の割合が高かった。筋肉内注射では、デモを実施しない学生も形態機能学の復習を行う必要のある課題がだされていたためと考えられた。デモを実施しない学生もグリセリン浣腸や一時的導尿でも形態機能学の復習を必要とするような働きかけが重要だと考えられた。

3. 技術の練習回数について

グリセリン浣腸および一時的導尿のデモを実施した学生は回答した全員が演習時以外に3回以上練習を行っていた。実施していない学生の群は、「演習時のみ又は演習時以外に1回」と回答したものが最も多かった。デモを実施しない学生の練習回数は少なく、学生の看護技術は経験したことがあるというレベルにとどまり、技術が身につくほどにはいたっていないことが明らかになった。またデモを実施するためには3回以上の練習が必要であると考えられた。

4. 学生によるデモンストレーションの評価

(1) 良かった点について

デモを経験した群では回答した20人中10人が、技術が身につく点を挙げていた。「積極的に学習し練習した」など主体的に取り組んだことがその理由として述べられていた。また深く理解した、学びを深めるなどの表現から教員のデモを見て実施するだけでは学べない根拠や考え方を学習できたと感じていたのではないかと考えられた。

デモを経験していない群ではよかった点として「学習意欲の向上」「自分と同じ視点」「関心」「わかりやすさ」という項目があがっていた。「学習意欲の向上」では、デモを実施する学生の様子から「自分もやらなければという気持ちを持った」と述べられていた。東が主観的成功率が行動を制御すると述べているように¹⁵⁾、学生がデモを実施することにより、その技術を行なうことが特別なことではなく学生自身が行なうべき身近な技術として捉え、やる気につながると考えられた。

(2) 良くなかった点について

デモの実施に関わらず、同じように学習できるように、学習ポイントを配布し、課題を出し、事前学習の必要性を伝えている。また技術の練習ができるように、演習室の使用に制限は設けていない。しかし、デモを経験した群も経験しなかった群でも「学習内容の差」を挙げていた。実際にはデモを実施した群としなかった群では事前学習内容や練習回数に

差があり、技術の習得度に差が出ることは当然だと考えられる。デモを実施していない学生もデモを実施する学生の姿を見て学習意欲を刺激されるが、デモを実施した学生と同様のレベルで学習するまでには至っていない。

デモを担当した学生は、他の学生の前で正確にデモを実施したい、失敗したくないという気持ちが働き、疑問を解消するために調べ、練習をし、意欲的に取り組んだと考えられる。学習意欲には自己責任性が関与する。すなわち自分の関与が事象の成功や失敗につながると予想される場合には、その取り組みに意欲的になれるのである¹⁰⁾。講義だけでなく、技術演習でも、自分の行為や考えを発表する場を作ることが、重要だと考えられた。

デモを経験した群も経験しなかった群もデモの実施に伴う負担をあげていた。現状ではデモを実施する学生が一部の者になるために、「学習内容の差」や「負担を感じる」など不公平感が助長しているのではないかと推測された。

また「デモのわかりやすさ」と反対に「デモのわかりにくさ」が両群ともあがっていた。デモを行なうにはプレゼンテーションの技術も要するが、その技術を実施することで、精一杯の学生もいたと考えられる。教員はデモを見ている学生にポイントが伝わっているかどうか意識してデモに参加し、わかりにくいところを補足することが必要だと考えられた。

V. 研究の限界

質問紙の配布が総合演習の開始前であったため持ち帰る学生も多く、回収率は60%程度にとどまっており、本研究の結果は学生の評価を十分反映しているものではないと考えられる。今後はさらに教育方法を工夫し、再度学生による評価をする必要がある。

VI. 結論

デモを経験した群も経験していない群も、学生がデモを実施することを「よかった」と評価した

学生が多かった。良かった点として、デモを経験した群は、「技術の習得」をあげていた。また、両群ともに「学習意欲を刺激する」ことがあがっていた。良くなかった点として両群ともに「負担感」および「学習内容の差」を挙げていた。デモを実施した学生群は、実施していない学生群に比べ、形態機能学の復習を行っているものが多く、また練習回数も3回以上と回答していた。デモを実施していない群は、学習意欲を刺激されても、実際に自分が学習するまでにはいたっておらず、学習内容に差が出ていると考えられた。今後は学生全員がデモを担当できるように項目数を増やし、負担感を排除し、またデモを実施していない学生も主体的に看護技術を習得できるような取り組み方を考えていくことが課題である。

<引用文献>

- 1) 山崎美恵子, 長戸和子: クリティカルに考える能力の育成, 看護系大学における技術教育, インターナショナルナーシングレビュー, 25(2), 36-40, 2002
- 2) 小山真理子: 看護基礎教育における看護技術教育の充実に関する研究(平成17年度厚生労働科学研究費補助金, 医療技術評価総合研究事業), 4-7, 2006
- 3) 松田民子: 大学教育における「身体侵襲を伴う看護教育」の実際と課題, 看護展望, 27(10), 23-28, 2002
- 4) 小野殖子: 看護教育の視座, 82-88, ゆみる出版, 1987
- 5) 岩本真紀, 南妙子, 近藤美月他2名: 看護技術習得に関する教育方法の検討-学生リーダーの指導によるグループ学習と個人学習を組み合わせ-一, 香川医科大学看護学雑誌, 8(1), 13-25, 2004
- 6) 魚住郁子, 渡辺弥生, 伊藤豊美他5名: 看護技術を習得するための指導方法-1, 2年の合同技術演習がもたらした効果-, 看護学会論文集(第31回看護教育), 84-86, 2000
- 7) 田村由美, 中田康夫, 澁谷幸他2名: 科目「看護技術演習」における3つの教授-学習方法の導入-ピアリーダーシップ・リフレクティ

- ブジャーナル・チューター制ー, 日本看護学教育学会誌, 14 (1), 47-56, 2004
- 8) 緒方巧: 緒方式ジグソー学習法による基礎看護技術の教育方法, 看護教育, 45 (1), 73-77, 2004
- 9) 南妙子, 近藤美月, 岩本真紀他 2 名: 「日常的手洗い」技術習得のための教育方法の検討ー看護学生の実験演習における学びの内容からー, 看護研究学会雑誌, 26 (3), 328, 2003
- 10) 野戸結花, 皆川智子, 川崎くみ子他 2 名: 看護学生の基本技術の経験度と自立, 弘前大学保健学科紀要, 3 (9) 9-16, 2004
- 11) 堤かおり: 身体に積極的関心を注ぐ演習方法の検討, 看護学会論文集 (第34回看護教育), 56-58, 2003
- 12) 中山栄純, 滝内隆子, 金若美幸: 看護教育における検証的方法を取り入れた授業評価, 看護学会論文集 (第34回看護教育), 189-191, 2003
- 13) 中新美保子, 田中福恵: 小児看護学における技術教育の方法論に関する検討, 川崎医療福祉学会誌, 13 (1) 37-45, 2003
- 14) 鈴木のり子, 宇佐美美弥子, 根本茂代子他 2 名: 主体的に基礎看護技術を習得するための教授方法の工夫, 看護教育, 42 (11), 1031-1035, 2001
- 15) 東洋: 教育の心理学的基礎, 122-124, 朝倉書店, 1982
- 16) 15) 前掲書, 124-126